

ポストスハルト期におけるインドネシア華人のアイデンティティ  
——スラバヤでのインタビュー調査より——

中 谷 潤 子

Ethnic Identity Among Chinese Indonesians in the Post-Suharto Era:  
Study Based on Interview Surveys in Surabaya

NAKATANI Junko

**Summary**

This study considers ethnic Chinese identity in Indonesia following the collapse of the Suharto regime in 1998. Until now, there has been no common denominator for either passing on the Chinese language, or being aware of one's identity as an Indonesian ethnic Chinese. This demonstrates identity to be something transformed in response to differing interactions and negotiations between setting, circumstances, people, and society.

In the present situation after ethnic Chinese have regained cultural freedom and control over language use, we were able to conduct interviews with eleven Chinese Indonesians in 2013, who were raised as members of the post-Suharto generation and were likely to understand the changes brought about on ethnic Chinese identity.

The results did not show that clear changes in identity had resulted from the era transition or between generations. While the informants clearly understood their Chinese ethnicity in the context of the historical era shifts, they also expressed pride at being ethnically Chinese, which strengthened in response to the trauma of the pre-existing discrimination that has continued. Moreover, the pressure to integrate, to be an "Indonesian," and the contrasting awareness that accompanies their prioritization of not to be *pribumi*, but rather ethnic Chinese, are seen to coexist.

キーワード：インドネシア華人：Chinese Indonesian, アイデンティティ：Identity, ポストスハルト時代：Post-Suharto era

## 1. 研究の背景

### 1.1 はじめに

インドネシアにおいて、ポストスハルト時代も早や15年を超えた。30年あまりに及ぶスハルト時代に同化を強いられてきたインドネシア華人を取り巻く状況にも、様々な変化が見られるようになってきた。筆者はこれまでの研究で、インドネシア華人の言語継承や華人意識には共通性はなく、アイデンティティは、場面、状況や人物、社会との相互作用に応じて変容していることを明らかにしてきた。

スハルト体制崩壊後は、華人への差別的な条項が法律から撤廃され<sup>1)</sup>、中華人民共和国の経済発展とともに、華人の言語文化にも注目が集まるようになってきた。そのような中、華人自身の意識やアイデンティティには変化がみられるのか。本研究では、華人へのインタビューを行い、その「語り」に注目した。語ることで、自らの意識が形となり、表出されていくという過程を重視する立場から、本研究は、できるだけ生の語りを生かす形で、彼らのアイデンティティ意識を明らかにしていくこととする。

### 1.2 先行研究と研究の目的

インドネシアでは、1965年から1998年まで続いたスハルト時代には、SARA<sup>2)</sup>に関わると考えられる研究は公然と議論することが禁じられ、華人研究もその一つだととらえられてきた(青木2006)。しかし、スハルト体制崩壊後には、華人研究も盛んになり、華人も堂々と自らを華人だと表明するようになる。

貞好(2000, 2002, 2003, 2004)では、主に中部ジャワにて、30年余りの同化政策のなかであやふやとなった華人のカテゴライズについて実態調査を行ってきた。そして、華語、華人文化が解禁されたからといって、たちまち「華人」としての意識を高めていき、その存在を主張していくのかについては疑問を呈している。

北村(2007)はインドネシアでの華人のミュージアム建設計画から、そこに表象されるエスニシティの創成と可視化のプロセスについて分析している。1998年の暴動以降、華人は集団としての負のイメージを払拭する必要性があり、そのため華人による宗教、言語、文化行事等が手掛けられ、エスニシティが可視化される。しかし、表象されるべき文化に、

---

1) 3.3に詳述。

2) SARAとはSuku Bangsa, Agama, Ras dan Antar Golonganの略語で種族、宗教、人種、階層関係の意。

統一した定義があるわけではなく、華人アイデンティティの内容はいまだ模索中であることが指摘されている。

中谷（2009）では、日本在住インドネシア華人を対象に、移動することでその社会との相互作用によりアイデンティティをどのように変容させていくのかについて、分析している。各家庭環境、就学や就職によるこれまで環境からの変化、そして海外でのホスト社会と関わり、他国からの華人との出会いが、アイデンティティの変容に作用していることが語りの中から示される。そして津田（2007）では、スハルト体制の下でのネガティブにあてがわれた「華人性」とは異なり、現在では華人自らが積極的に「自文化」を摂取しようとしている全体的な傾向があると述べている。

ポストスハルト期の華人社会や華人文化は自由を取り戻したように見えても、華人自身が自分たちをどうとらえ、どう表象していくかは確固としたものではなく、社会との相互作用において流動的な体をなしていることが伝わる。アイデンティティが固定的なものではないということがアイデンティティに関する先行研究で述べられているからこそ、時代の変化の中で、個人のアイデンティティが更に変容している可能性があるのではないかと考える。

本研究では、インドネシアの東部ジャワに位置する第二の都市スラバヤで、ポストスハルト時代を生きる華人男女11人に、2013年に行ったインタビューをもとに分析する。学齢期がポストスハルト期にあたり、スハルト時代をほぼ知らない世代では、その親世代とは異なる華人意識がみられるのではないか。時代を経た華人の意識変容をその有無も含めて、追うことを目的とする。

## 2. 調査

### 2.1 アイデンティティ

アイデンティティは、E・H・エリクソンが使用した「自我同一性」(Erikson1968) という概念で知られている。新井（1995：38）にもあるが、「E・H・エリクソンは、アイデンティティを『ego』（自我）と『self』（自己）の二つの面から考察している。自我アイデンティティは、自我の心理・社会的機能、すなわち統合力に注目したものである。それに対して、自己アイデンティティは、社会的な役割あるいは他者との関係において承認されることによって確立されるような側面に注目したものである」。「一般的には、アイデンティティを強く意識しなくてもよいのが健康な状態の時、意識せざるを得ないのは、アイデンティティが危機に陥っているときでもある（原1995：12）」。インドネシア華人も、常に社会の中の他者との関係においてアイデンティティが形成され、そのアイデンティ

ティは可変的かつ流動的なものであるのだといえる。ひいては、「自我 (Ego)」といっても核になる固定的なものが存在するのではなく、「自己 (Self)」が流動的な構築過程であれば、当然それにともなう「自我 (Ego)」も流動的な構築過程である。

そして、アイデンティティに関連する概念として、自らを華人と捉えるかという点については「華人意識」として、そして文化や習慣、容姿など何らかの華人表象は「華人性」として分析を行うこととする。

## 2.2 調査方法

本研究では、2013年にジャワ島スラバヤにて、計11人にインタビューを行った(表1参照)。これまで首都ジャカルタを調査の中心としてきたが、地域による差がみられるのかどうかについての検討の必要性を感じてきたため、今回は第二の都市であるスラバヤを対象地とした次第である。インタビュー協力者の年代は20代6人、30代1人、40代4人で、男性3人女性8人である。協力者はインドネシア人アシスタントに依頼し、探してもらった。スラバヤにはカリマンタン島出身者が多いのだが、アシスタント自身もカリマンタン島出身のため、同じ出身地の知り合いが多い。また20代は大学生ばかりだが、これはアシスタントが教鞭をとる大学の学生やその友人である。このように協力者11人は、比較的裕福で、生活に不自由しない教養のある層だといえる。富裕層は華人の中でも、どうしてもプリブミ<sup>3)</sup>からも「異」の存在と見なされることが多く、それを華人自身もプリブミも意識していると感じるため、「異」視されてきた層に、現在までにどのような意識変容がみられるかを知りたいと考えた。また、ルーツについては、両親どちらかのルーツしか判明しない場合でもそれを記述してある。また世代は、基本的に父方の代で数えている。

宗教については、11人全員がキリスト教信者である(フリーである一人も現在キリスト教を信仰する)。華人の多くは、もともとは仏教や孔子教と呼ばれる儒教を信仰していたが、その後儒教が準宗教であるとされていたこともあり<sup>4)</sup>、キリスト教(クリスチャンと呼ばれるプロテスタントとカトリック)に改宗している人が多い(貞好2002:75)。もちろん、キリスト教や仏教のプリブミ、そしてイスラム教である華人もいないわけではないが、全体から見ればほんのわずかである。国立の学校にはプリブミが多く通い、当然教師を含めほとんどがイスラム教徒である。一方、私立学校はキリスト教系の学校が多く、それも華人が多く通うことの理由の一つである。宗教とアイデンティティについては、中

---

3) インドネシアにもともと住んでいたジャワ人やバリ人などの土着の民族を指し、それに対して華人をノンプリブミという。

4) 儒教は長年一つの正式な宗教としては認められておらず、2006年に正式に宗教の一つと認められた。

谷（2009）で分析しているとおりで、本研究では特に触れてはいない。

インタビューは、喫茶店などで各2時間程度行った。インタビューには、協力者であるインタビュイーと執筆者であるインタビュアー、そしてインドネシア人アシスタントが同席した。アシスタントも研究者で、インタビュー経験や、日本や欧米からの研究者のコーディネート経験が豊富なため、同席はメリットになると判断した。なお、インタビューでは、アイデンティティ変容に迫るべく、幼少期の経験、家族環境やスハルト期とポストスハルト期の比較などについて、半構造化形式で語ってもらい、協力者に了解を得たうえで録音し、その後内容をコード化した。

なお、結果では、データを生の「語り」として引用し、括弧のなかに日本語訳を記した。やりとりで「W」と記されているのはインタビュアーである執筆者で、AやBというのが協力者を指す。

表1 協力者の概要

		年代	性別	出身	職業/身分	ルーツ	宗教
1	A	40	女	カリマンタン	フリーランス	福建, 福州3世	カトリック
2	B	40	女	スラバヤ	主婦・企業家	福建	クリスチャン
3	C	20	女	カリマンタン	大学生	不明	カトリック
4	D	20	女	カリマンタン	大学生	不明, 4世?	カトリック
5	E	20	女	スマラン	大学生	広東, 福建	カトリック
6	F	20	男	スラバヤ	大学生	福建?	クリスチャン
7	G	30	女	カリマンタン	会社員・企業家	福建? 5世	カトリック
8	H	20	女	スラバヤ	大学生	福建, 3世	クリスチャン
9	I	20	男	スラバヤ	大学生	福建, 3世	フリー <sup>5)</sup>
10	J	40	女	スラバヤ	フリーランス	不明, 7-8世	クリスチャン
11	K	40	男	カリマンタン	会社員	客家	カトリック

### 3. 結果

#### 3.1 華人意識

自らは「華人」なのか、「インドネシア人」なのか、それは何に因る意識なのか。そのアイデンティティは決して固定的なものではなく、状況・相手・立場などに合わせて流動的であることが明らかになっている（中谷2009）。今回のインタビューからも、彼らの揺れ動くアイデンティティが随所にみられる。

5) フリーというのは、一つの宗教に限定せず、今までも色々な宗教を信じ、そのたびに礼拝や寺への参拝などを繰り返してきたことを指す。

①

A : Mama saya selalu bilang kita ini orang..., dalam bahasanya dia itu Toneng, ya. Orang Toneng itu orang Tionghoa<sup>6)</sup>, tetapi dia selalu bilang kita ini juga orang Indonesia. (母はいつも、彼女はトナン<sup>7)</sup> = 華人だと言っている。でも彼女は、我々はインドネシア人だ、とも言っている。)

W : Ya, ya. Orang Cina tapi orang Indonesia. (はい、華人。でもインドネシア人。)

A : Kita ini orang Indonesia. Kalau kita orang Cina itu karena nenek dan kakek itu, ama dan akung itu dari Cina. Ya, itu yang bikin kita orang Cina. (我々はインドネシア人で、華人だというのは祖父母が中国から来ているから。それが私たちを華人にしている。)

Tapi kamu itu orang Indonesia. Itu mama. Karena kita, anak-anak mama itu dibesarkan oleh mama. Karena papa itu sibuk bekerja.

(でもあなたはインドネシア人なのだ。それが母(の方針)だった。我々は母の子で母親に育てられるから。父親は仕事が忙しいし。)

①のAの語りから、自分が華人かどうかという意識には、親の教えが強く影響していることがわかる。家庭環境がアイデンティティ形成に大きく影響していることがわかる語りは、今回のインタビューにも多く見られ、時代や世代うんぬんよりも、家庭環境、親の価値観の継承がみられた。しかし、②のJは自らアイデンティティを追い求めてきた。

②

J : Terus itu kenapa saya cerita, karena itu membuat awal-awal waktu saya kecil, saya merasa saya tidak punya identitas. Iya saya Indonesia tidak, karena teman-teman menolak gitu, tapi saya *China* juga tidak karena saya nggak punya akar di situ.

(なぜそれを話すかという、そもそも、私は小さいときアイデンティティを持たないと感じていたから。私はインドネシアかといえばそうでもない、なぜなら友達が拒絶するから、では華人(China)かという、それもまた違う、なぜならばそこ(China)につながりを持っていないから。)

6) 華人を指す言い方には、orang Tionghoa, そしてスハルト時代に多用され差別的意味を含んだ orang Cina, 英語の Chinese などがある。ここではインタビュー어가華人を指す意味で使ったものは、便宜上全て「華人」と訳す。

7) 潮州系の発音で華人を指す。

J : (前略) Karena saya nggak merasa saya *China*, jadi itu. Cuma penampilan, terus kenapa harus ada perbedaan? Sampe akhirnya saya ikut ke seminar, yang di ××<sup>8)</sup>. Saya ikut seminar tentang kechinaan. Hanya untuk mencari identitas.

(私は華人だとは思っていないから。容姿だけ。じゃあどうして異でなければならぬのか。ついに私は××でのセミナーに行った。華人についてのセミナーに参加した。アイデンティティを探すためだけに。)

J : Begitu Suharto nggak ada terus muncul kan, barongsai dan sebagainya. Nah pada saat itu saya baru merasa pas dengan identitas gitu. Jadi gimana gimana meskipun saya bilang saya Indonesia, ya saya bukan Indonesia,tetap gitu. Jadi dari seminar itu baru muncul, “Oh aku ini China ternyata hehehe”.

(スハルトが旧正月などを継続させなかったでしょう。その時私はアイデンティティというのを感じた。私がいくら自分はインドネシアだと言っても、私はインドネシアではない。それは決まっている。だから私はセミナーで初めて思った。「ああ、私は実は華人だったんだ」と。)

Jは華人について考えるセミナーに参加したことで、自らのなかの華人意識に目覚め、今は「自分は華人だ」という意識を強く持つようになったという。このように、アイデンティティが明確に転換し、その転機がはっきりしているケースは珍しく、多くは①のAのように親に「華人だ」と言われて育ち、いつの間にかそういう意識が植えつけられている。

50代後半以上の世代だと、幼少期にはまだ華人学校や華語学習が禁止されておらず、学齢期の途中でスハルト時代に突入している。したがって、華人文化禁止時代を経験しており、現在よりも抑圧された世代であるといえる。本研究ではポストスハルト時代の華人意識というものに着目したのだが、ポストスハルト世代であってもスハルト期に育った親の意識がまだまだ強く継承されている。

### 3.2 華人性

続いて、華人性について考える。華人性とは、何をもって華人だとするのかということ指し、文化・習慣・容姿などインタビューが華人らしさを示すものとしてあげたものである。まずは、容姿についての言及がことのほか多かった。

---

8) 場所の名前。

③

W : Identitas dari Cina itu... dari... dari mana ya?

(華人というアイデンティティは、どこから。)

H : Identitas Cina-nya? Mungkin karena orang melihat *face*, gitu lho. Langsung. Iya.

Karena dia melihat *face* langsung, dia sudah bilang “Kamu Cina!” Gitu lho. Emang udah langsung... (華人アイデンティティ。多分顔を見てだろう。すぐに。顔を見てすぐ「あなたはチナだ!」と。そう、すぐに。)

そして顔つきについては具体的に次のように述べている。

④

J : Dari kulit, pokoknya. Kulit sama iris mata, gitu....

(肌の色から、とにかく。肌と細目、そう。)

⑤

W : Hal apa yang mengingatkan kamu sebagai orang Tionghoa itu apa?

(あなたが華人だと気付かされることはどんなこと?)

B : Ya, mungkin kebiasaan. (多分、習慣。)

W : Kebiasaan yang mana? (どんな習慣。)

B : Terus pola pikir. Terus secara fisik ya warna kulit. Terus cara kita me-*manage* sesuatu. (考え方、物理的には肌の色。それから何かの管理の方法とか。)

考え方については後述するが、外見だけでプリブミと華人は見分けが付きやすいことから、それが幼少期のからかいの種にもなっていたし、最も簡単な「華人」を表象する点となり、意識する点となっている。

しかし、華人性を如実に示すものとして容姿を挙げている一方で、③であげたHは次のようにも述べている。

⑥

W : Kamu melihat derajat orang Tionghoa dibandingkan orang bukan Tionghoa itu bagaimana? Maksudnya, orang Tionghoa lebih tinggi juga? Posisi, derajatnya?

(華人と華人ではない人のレベルはどうか。華人のほうが高いか。地位、レベルとか。)



H : Sebenarnya kalau misalnya derajat... derajatnya itu sama, Karena bagiku, kita tuh sama-sama manusia. (実はレベルは同じだ。我々は同じ人間だ。)

Kita hanya berbeda, ya itu, di kulit sebenarnya. Kulit hitam dan kulit putih. Sama dengan Amerika, hitam dan putih, putih yang disanjung. Kalau di sini Cina, hitam dan putih, Cina yang disanjung. Iya... (私たちはただ肌の色が違うだけ。黒い肌と白い肌, アメリカにも黒と白があるのと同じ。白のほうが称賛される。ここでは華人との黒と白で, 華人が称賛される。)

肌の色が異なるだけで, 同じ人間である。しかしその肌の色で称賛される側があるという。

次には, ⑤にもあるように, 考え方や性格などから華人性に言及しているケースである。

⑦

I : ...sebenarnya cukup... itu ya... ee... sedikit rasis sebenarnya. Jadi memang udah kayak dibedakan, kayak dibilang kita itu lebih... apa... kita tuh lebih baik dan sebagainya, gitu ya. Jadi memang dari kecil udah diajarkan kalau kayak gitu.

(実は十分に, えー少し人種差別的になるが。そもそも違うというか。我々のほうが良い, とか。そしてそもそも小さい時からそう教えられてきたし。)

W : Baik apa ya? (何がいいのか。)

I : Baik itu maksudnya kayak... ee... kita tuh lebih rajin, lebih... apa..., kalo orang pribumi tuh lebih malas, kayak gitu-gitu. Jadi memang sudah ditanamkan kayak gitu sih. (いいのは, つまり, われわれのほうが勤勉だとか, その, プリブミのほうが怠け者だとかそういうこと。そもそも, そうだと植えつけられてきた。)

第一に口にするのは, 華人のほうが勤勉だという点である。実際に, 華人はインドネシアの人口の3パーセント前後だと言われながら, 経済の70パーセント以上を握っていると言われていたこともある。大企業のオーナーでなくても, 大陸から移住して苦労を重ねた挙句, 商売などで成功している人も多いことから, よく働くということは一般的に広く行きわたっているイメージだといえる。

⑧

F : Jadi kalau misal..., biasanya kalau ada orang *Chinese* ada uang sekian, dia bisa

simpan sekiannya untuk masa depannya. Kalau orang pribumi kan biasanya dia ada uang, terus dia habiskan, seperti itu.

(だから例えば、一般的に華人はこのぐらいお金があればこのぐらいを将来のために節約しておこうとする。プリブミは一般的にお金があれば使ってしまう、そういうこと。)

⑨

D : Kadang-kadang ada beberapa, apa ya, prinsip yang beda, gitu. Misalnya, kita merasa kebanyakan, kan kita, kalau dari saya ya, kadang ini kepikiran, ini dirinci. Anggapannya ini pelit lah. (時々いくつか方針が異なる。たとえば我々の多くが、私に言わせると考え方が細かい。けちだと思われている。)

Gitu, kan. Kadang-kadang kita perhitungan. Pelit, gitu kan. Kalau mereka itu nggak. (そうでしょう、時々我々は計算高い。けち、でしょう。彼ら(プリブミ)はそうではない。)

⑧と⑨は関連する。華人は金に対して堅実だが、Dは、華人のこの「けち」だというイメージがとても嫌だとも言っている。

働き方や金の管理については、インドネシア華人に限らず、中国大陸出身者も含めた世界中のチャイニーズに対するイメージとして一般的に浸透しているといえる。インタビューは、プリブミにもよく働く人もいると言いつつ、これらのイメージはあながちイメージだけではなく、事実であることを経験から実感している。

そして、Dは華人として何が誇らしいと感じるかという問いに対しては、次のように言う。

⑩

D : Kayak misalnya tadi. Kita sama keluarga itu lebih dekat jadinya.

(たとえば、さっき言ったように、私たちは家族とより近い。)

しかし、華人の家族の在り方をプリブミ家庭と比べて、Cは次のように述べる。

⑪

C : Nah, itu yang C tidak dapatkan di keluarga. Dan di keluarganya pacar saya itu,

mungkin karena kakek-nenek yang bangun sekolah XX itu, kan hidup dengan orang-orang Belanda. Orang Belanda itu kan suka yang keluarga itu. (そう。それ<sup>9)</sup>はCも家族にしてもらったことがない。そして恋人の家族は祖父母がオランダ人と育ったXX学校だったから。オランダ人はそういう家族でしょう。)

Jadi *relationnya* itu, *attachment* nya deket gitu lho. Sama anak, sama pa-ma. Itu nurun sampai cucunya. Semua. Sampai besar pun mereka seperti itu.

(だからそういう関係。親密な愛着。子どもにも親にも。それは孫までも。皆。大きくなってそう。)

Tidak ada rasa malu. Jadinya, mamanya pun kadang bisa meluk gitu, terus kayak, hah, di keluarga nggak pernah kayak gitu. (恥ずかしいとは思わない。お母さんも時々ハグする。そして私の家族はそんなことしたことはなかった。)

Itu yang C cari dari dulu. Papa mama tidak pernah seperti itu. Terus makanya tak bilang lagi, kebiasaan bilang “*I love you*” ke orang tua kan gak ada. Itu mereka banget gitu lho. (それがCが昔から求めていたこと。両親はしてくれたことはなかった。それに親に「アイラブユー」という習慣もないし。それを彼らはすごくする。)

Jadinya itu banyak nilai-nilai positif itu yang C dapatkan. Bukannya marah-marahlah kan kalo orang Tionghoa itu, papa mama itu suka marah. (だからとても肯定的な価値だと感じた。親は華人みたいにがみがみ言わない。両親はよく怒った。)

Cにはプリブミの恋人がおり、その家族の愛情表現は明示的で、それはこの家族がオランダ式教育を受けたからだと感じている。これは華人家族の厳しい親子関係とは異なるもので、華人の家族は絆は強いが、この家族のように愛情を明示的に表現するものではないと述べる。

### 3.3 華人アイデンティティの経年変化

華人に対して同化政策を行ってきたスハルトの退陣後、インドネシアではそれまでの華人への圧力や差別が撤廃されていく。簡単にあげると、1999年に中国語の使用と教育を禁止する規定が見直される。2002年には、旧正月が正式に国の祝日になり、2004年にはSBKRI(国籍証明書)所持義務の撤廃が正式に決定する。さらに2006年に華人への差別を全面撤廃する方針が明らかにされ、儒教が正式な宗教の一つとして認められることとなった。そして、2006年新国籍法の成立により、インドネシアで出生したものは「イン

---

9) スキンシップの話題なので、「それ」はスキンシップを指している。

ドネシア国籍」であるということが法律により定められたのである。

現在 20 代だと、1986 年から 1995 年ごろに生まれており、スハルト期はせいぜい小学生までで、その後はポストスハルト期である。彼らとスハルト期の華人とでは、意識の差はあるのだろうか。

これまでのデータの語りからもわかるように、スハルト期とポストスハルト期の華人を比べても、アイデンティティや華人だという意識が明確に変わったとは言えなかった。それは、ポストスハルト期に相当する現在 20 代の華人もスハルト期を経験した両親に育てられ、彼らの華人アイデンティティには、親の意識が濃厚に継承されているからである。

現在は学校でもマンダリン学習が行われているため、公の場でマンダリンが学習できるようになった。しかし、多くの華人が習得したとは言い難く、機会があればもっと学びたいと言っている人もいる。スハルト時代にも家庭教師などで個人的にマンダリンを学習していた人はいた。ただ、その習得程度は、現在のほうが上がっているとは言いきれない。

⑫

W : Tidak mau belajar bahasa Mandarin? (マンダリンは勉強したくないか。)

E : Jujur, saya *give up* belajar bahasa Mandarin. Kelas 3 SD sampai kelas 3 SMA enggak bisa. Hahaha. Dan saya merasa itu susah, dan saya *give up*. (正直言って、私はマンダリンを勉強するのをあきらめた。小学校 3 年生から高校 3 年生まで(やって)、できなかった。難しいと感じてあきらめた。)

以前インタビューしたスハルト期の華人が、「(華語や華人文化が禁止された) 30 年という年月は長すぎた」と言っていた。禁止かどうかにかかわらず、日常的に華語に触れずに育ってきた世代は、自分たちが華人だということ、華語習得にはもはや相関性はないといえる。そして現在のインドネシア社会では華人文化も解禁され、差別は依然としてあるものの、かつてほど華人であることを隠さなくてもよくなった。では、そのような時代変化を華人自身はどのように感じているのだろうか。

⑬

W : Posisi orang Tionghoa di Indonesia lebih bagus, ya?

(インドネシアでの華人の立場は前より良くなったか。)

A : Lebih bagus. Lebih bagus dalam artinya begini. Mereka boleh ikut di wilayah manapun. Tetapi sebenarnya bagusnya itu bukan karena Suharto. Oke, Suharto

salah satunya. Tetapi, kontribusi yang besar juga itu adalah *boomingnya* orang Cina. (よくなった。よくなったというのは、どう進んでもよくなったんだという意味だ。でも実はよくなったのはスハルトのせいではない。スハルトも一つの要因だ。でも中国人ブームが大きく貢献している。)

W : Oh iya, iya. Saya juga merasa begitu. (なるほど私もそう思う。)

A : *Boomingnya* orang Cina mempengaruhi bagaimana cara pandang orang Indonesia terhadap orang Cina dan orang Tionghoa. (中国人ブームがインドネシア人の中華系や華人への見解に影響している。)

W : Orang Tionghoa di sini atau orang Tionghoa di Cina?

(この華人, 中国大陸の中国人。)

A : Orang Tionghoa di sini dan orang Tionghoa di Cina, dan orang Cina, ya.

(この華人と中国大陸の華人, 中国人だ。)

1998年のスハルト体制終焉とほぼ時を同じくして、中国では改革開放による経済成長が一気に進み、世界で注目される存在となった。それが中国、そして華人の立場を肯定的なものとする一因となった。若い世代がマンダリン習得を望むのも中国の発展があるからこそである。中谷(2009)では、20代のインドネシア華人は、「マンダリンを身につけても使うチャンスがない」と述べていた。

このようにインドネシア社会も変貌しつつある中で、プリブミが身内になることには依然抵抗感が伴うという声もある。華人ともジャワ人とも付き合ったことがあるというDは、次のように言う。

⑭

W : Apa bedanya punya pacar orang Tionghoa dan punya pacar orang Jawa?

(華人の恋人とジャワ人の恋人は何が違うか。)

D : Kalau misalnya sama orang Tionghoa, yang pasti keluarga lebih *welcome*. Keluarga lebih *welcome* dengan keadaannya dia. Terus untuk masalah yang pergi, pergi itu kita tidak merasa, "Oh, saya jalan sama yang pribumi." Jadi ada kepuasan sendiri lah. (華人のほうが家族は絶対歓迎する。家族は彼の状況のほうを歓迎する。それから出かけても「私はプリブミと歩いている」とか思うこともない。これは自己満足だ。)

恋人である以上、相手のことを好きなのだと思うが、華人のほうがいいと感じるのは、

周りの目があるからである。多くのインタビューの身内には、プリブミと結婚した人がいた。そして夫婦関係はあくまでも夫婦の問題であるものの、親や親せきからの反対や生まれた子が学校でからかわれたことなど、当人同士だけではすまない問題点があげられた。自らの意思だけでは意識が決定できないのは、社会との相互作用ゆえであろう。しかも、プリブミから差別されてきた華人が、身近なプリブミとそれに近い華人を排除しようとする行動によって、差別構造の生産者ともなっているのだ。

華人意識を時代の変化という面からみても、プリブミとの共存を「肯定」という変容と依然とした「否定」意識との相反した構造が残っているのがわかる。

#### 4. おわりに

以上のように、インタビューから、ポストスハルト期とはいえ時代や世代によって、インドネシア華人のアイデンティティが明らかに変容しているとはいえないことがわかった。時代変化とともに華人であることをより肯定的にとらえている一方、依然として残る差別が逆に華人としてのプライドを強める要因にもなっている。また、プリブミでも華人でも関係ないと「インドネシア人」としての統合性を口にするのと、華人であることの優位性を述べ、逸脱意識を表明することという矛盾した意識の同居も強くみられた。ただ、程度の差はあれ、全体的には「インドネシア国籍」をもつインドネシア「国民」だという意識と「華人」の資質を持っているという「人種・民族」意識があることは共通しているといえる。

また、同じ人間なのに差別されるという被害者意識がある一方、自らがプリブミを差別し、「自分も人種主義者の一面がある」と認めるという相反構造もみられる。

さらに、「華人イコール中国人ではない」という意識はかなりはっきりしていた。現在は、中国大陸、そして台湾、香港などの中華圏、そしてシンガポールやマレーシアなどへ行ったことがある人が多い。ルーツである中国大陸へ行っても、「同じ」ではないが、「自分のルーツ」につながる場所なのだという距離感で見ている。また、中国大陸出身以外の華人と出会い、マンダリンができない自分というものを突き付けられ、そこで「言語と民族」を意識したという声も聞かれた。

アイデンティティの芽生えは、幼少期の環境、多くは家庭、そして学校などの社会環境が中核をなす。そしてその後の意識変容は、社会環境が作用し、移動など環境変化が大きければ大きいほど、アイデンティティの可変性も大きいといえる。

ポストスハルト期が年数を重ねていくのみならず、中国との関係やグローバル社会の進展についても目が離せない中で、次世代にはさらなる意識変容があるのだろうか。

また、今回対象としたのはスラバヤという一地域だが、スラバヤならでは、または協力者の出身地であるカリマンタンならではという地域性は、インタビュー結果の中では特に明らかにはならなかった。今後、さらなるデータ収集を重ね、時代差、世代差に続き、地域差の検討も含めて、引き続き分析を行っていきたい。

#### 引用・参考文献

##### 日本語文献

- 青木葉子（2006）「インドネシア華僑・華人研究史—スハルト時代から改革の時代への転換—」『東南アジア研究』43-4：397-418頁。
- 新井郁男（1995）「日本人の異文化接触とアイデンティティ」『異文化間教育』9：37-51頁。
- 北村由美（2007）「エスニシティ表象としてのミュージアム—ポスト・スハルト期のインドネシアにおける華人アイデンティティの創成」『言語社会』1：385-406頁。
- 貞好康志（2000）「スハルト体制末期インドネシアでの『華人』カテゴリーをめぐる諸相—中部ジャワ・スマランでの調査より」『国際文化学』2：19-34頁。
- 貞好康志（2002）「ジャワ華人の統計的プロフィール—200人の社会・文化的傾向」『国際文化学』7：63-81頁。
- 貞好康志（2003）「生き延びる混血性—ジャワのプラナカン華人」『歴史評論』644：48-63頁。
- 貞好康志（2004）「ジャワで<華人>をどう識るか—同化政策30年の後で」加藤剛（編）『変容する東南アジア社会—民族・宗教・文化の動態』株式会社めこん61-92頁。
- 津田浩司（2007）「『華人国家英雄』の誕生?—ポスト・スハルト期インドネシアにおける華人性をめぐるダイナミズム」『アジア・アフリカ言語文化研究』73：27-71頁。
- 中谷潤子（2009）『多元的状况におけるアイデンティティの変容—滞日インドネシア華人を対象とした分析』大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文
- 原裕視（1995）「異文化接触とアイデンティティ」『異文化間教育』9：4-18頁。

##### 英語文献

- Erikson, Erik. H. (1968) *Identity: Youth and Crisis*. New York: W.W. Norton